

「無園児」支援に課題

専門家「届きづらい人に情報を」

八戸市の自宅で宮本望愛ちゃん(5)が虐待を受けて死亡した今回の事件。保護責任者遺棄致死の罪に問われた母親の菜々美被告(22)の裁判員裁判では、児童相談所など周囲の介入を家庭から遠ざけていた状況が明らかになった。専門家は虐待を見つけれなかった背景の一つに、望愛ちゃんが保育所や幼稚園に通っていない「無園児」だったことを指摘。「一番届きづらい人に一番必要な情報を届けない限り、問題は繰り返される」と強調する。

被告による暴力や育児放棄は千葉県内の実家にいる頃に始まった。家族にともめられ、その後、実際に相手手のある八戸市に転居。行政

との関わりを避けるうちに、虐待はエスカレートしていった。

八戸学院大短期大学部幼児保育学科の講師鈴木康弘さん(36)は、行政や地域から孤立すると虐待は「不可視化」されてしまい、発見が難しくなると説明。「無園児は貧困や虐待のリスクが高い」と指摘する。

保育園などに通っていないば、子育ての悩みを共有する機会があることなどを例示。「周囲の声かけがきっかけで、専門的なサポートにつながったかもしれない」とする。

事件前には2度の虐待の通告があったが、児相の面談は1度のみで、望愛ちゃんにあざがないかの確認は

洋服を着た状態で行っていた。

鈴木さんは「虐待に対する意識の高まりで相談件数は増加傾向で、現場は人手不足や多忙になっている。判断が難しいケースもたくさんある」と理解を示す一方、「人材育成も急務。地域や行政は問題に対応できるように、お金も人も注ぐ必要がある」と課題を挙げ

る。児相の対応を検証する県社会福祉審議会の児童処遇部会は、早ければ来年1〜2月にも報告書をまとめる。鈴木さんは「単なる犯人探しで終わらず、次の子どもたちを救うことにつながるなければならない」とし、再発防止に向けた対策の重要性を語った。